

子供達が自ら学ぶ社会科学習の一事例

— 第5学年 伝統を生かす工業の学習 —

足利市立松田小学校

多田 一雄

1 始めに

子供達と一緒に社会科見学に出かけた時のことである。学校の体育館の何倍もあるようなハウスのなかで、たくさんのトマトが作られているのを見るなり、

「うわあ、すごいたくさんある。」

「下の方は赤いけど、上の方はまだあおいよ。」

「花が咲いている。」

など、口々に驚きの声があがってきた。

ハウスの主人から、シーズンにとれるトマトの量、そして栽培方法を聞き視野を広げ、作られたトマトがどのように出荷されていくかを調べ、足利の産業が日本全国とのつながりがあることも確かめていった。

帰りに、主人からいただいた熟し過ぎたトマトを家まで大切に持ち帰りジュースを作った子供もいた。

身近にある施設を利用し、実際目で見、手でふれ、五感を通して観察学習をした事例である。低中学年では、学習内容そのものが地域性を含んだものであり、かなりの場面でこのような観察学習をすることができる。しかし高学年の学習内容は、身近にその事例となるものがない場合が多い。そのような場合、読み物や、視聴覚資料を使い、できるだけ具体的な教材を用い、より体験的に学習する構成を工夫しなければならない。

本校においても、児童の実態を見つめ、より体験的な学習活動の展開が努力点として打ち出されている。

そこでひとつの試みとして、日本の工業の学習の中で伝統を生かす工業の学習を、体験的に学習するよう設定した。

「体験的」と言っても、たくさんある産業を実際に見学するわけにはいかない。携わる人々に資料を求め、生の声を聞く方法は子供達にも考えられる。その立場から、子供達自らが資料を求め、調べ、思考し、その産業にかかわっていくことを私なりに「体験的」と解釈し、子供達中心の授業を進めていくことにした。

2 学習の展開

本単元の学習は「伝統を生かす工業」のオリエンテーションから始めた。

これは、次の二点について理解し、自らの追求課題を設定させるためのものである。

- 伝統工業が現在どのように日本各地で行なわれているか。
- 学習を網羅的に進めるのをふせぎ、焦点化して課題追求するようにさせる。

子供に益子焼きの湯呑みを提示したら、日頃食卓の上で見なれている食器なので、「益子焼きじゃないか」と言い出す者もいた。

どのように作られたかは理解されていなくとも、生活の中にある身近な物から学習をスタートした。そして教科書の地図を見て、日本各地で焼き物だけでなく、このような「伝統的工芸品」が作られていることを知った。

そして教科書や、資料「伝統的工芸品」（伝統的工芸品産業振興協会）を用い、「伝統的工芸品とは何かを調べた。

- 工芸品であること。 熟練した技で作られたもの。
- 主として日常生活場面で使用されているもの。
- 手づくりを中心に作られているもの。
- 100年以上にわたり、作る技術が守られているもの。
- 長い間、同じ材料で作られているもの。
- 一定の場所で作られているもの。

これらのことを理解した上で学習を始めたのである。

子供達の間から、ひとりではできるかどうかわからないので、グループを組んでやりたいという意見が出た。教師としては、個々の追求意欲を見とる上で個別にして欲しいと思ったが、個々の持つ力や、つまづいた時助け合い学習を進めることも意義があると考え、多くても三人までのグループで進めても良いことにした。

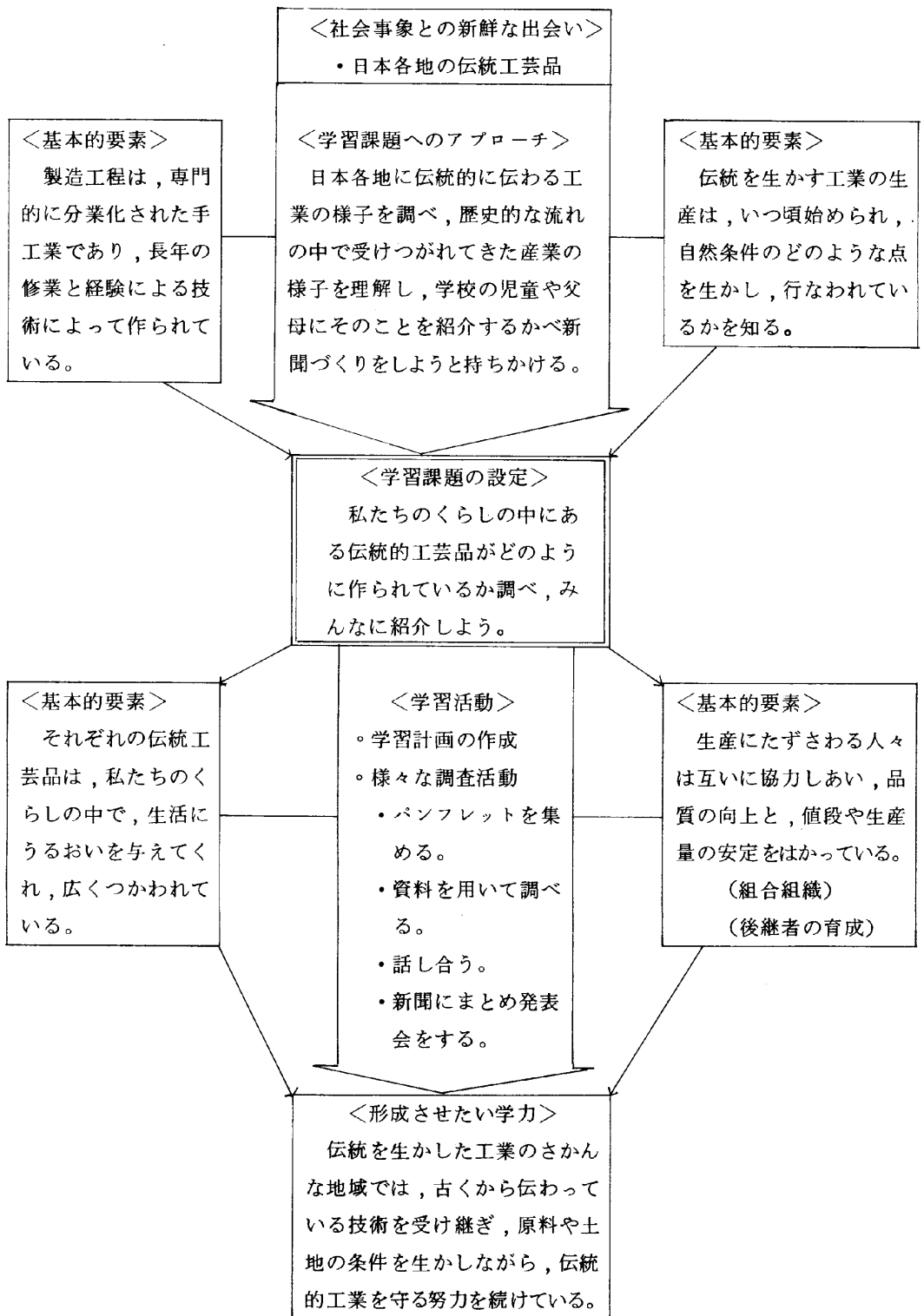
調べる内容ごとに2～3人の児童が集まった。教師側が、かなり援助を必要とするグループもできたが、子供達の興味の高さを考え学習をスタートさせた。

グループは次の8つである。

- ・十日町の織物
- ・小千谷縮
- ・天童の将棋駒づくり
- ・益子焼き
- ・桐生の織物
- ・九谷焼き
- ・輪島の漆器
- ・土佐和紙

学習を始めるにあたって、教師として単元構成の明確化をはかっておいた。

（次ページの図を参照）



(1) 資料を集める

自分達でこれから調べようとする資料をさがした。

学校の図書館で、家にある書物から、あるいは、県立図書館へ足を運び、資料をさがしてきた例があった。課題を理解するに十分な資料が検討したが、欲しいと思う項目や内容の乏しい書物が多かった。

そこでパンフレットのようなものを産地から取り寄せてみようということになり、さっそく電話や、手紙で問い合わせるグループができた。

産地の近いグループには電話で、遠方のものについては手紙でさせることにしたが、電話のかけかたや手紙の書き方などで手まどり、思わぬ勉強をすることができた。

相手の人にたずねる時の言葉遣いなど、日頃の生活の中で馴れぬ子供達にとっては、ドキドキする体験の場であった。

このようにして、手元になれば、どうしたら良いか考え追求していこうとする姿の中に学習の深化の第一歩があるように感じてならなかった。

(2) 返事を待つ子供達

三日、四日と日が過ぎるにつれポストの中をのぞく回数が増えていった。自分達の資料が来るのを今か今かと待ち続ける日が続いた。

そして第一通が届くなり、恐る恐る開ける封筒の中に期待の胸をはずませた。その後次いで届いた資料を見ながら学習を始めていった。しかしなかなか届かず学習予定が大幅に遅れるグループもあった。土佐和紙を調べるグループには、三週めも届かず、いらいらしていたが速達便で送ってくれた。

必要とする資料に限らず、見本や着地の切れ端などを送ってくれた。子供達は喜びまとめる中でどこでそれを利用しようか相談する顔に生き生きとした喜びがあふれていた。

どこの産地の方もたいへん親切であった。特に小学校五年生という発達段階を考えてくれ専門用語もわかりやすく、具体的な説明をしてくれた。また、どの手紙の中にも、郷土への愛情にあふれた内容がうかがえ、この学習の目標を達成する上で、たいへん参考になった。

(3) 再び手紙を

送られてきた資料をもとに調べる活動を続けると、どのグループも送られてきた資料ではわからない点ができた。

①現在における工場数と従事する人の数。

②製作に携わっている人々の声。

③後継者をどのように育成しているか。

などである。

そこで再度産地へ手紙を送り、聞きとることにした。

①および③は、各産地の組合や、役所の商工課などを通じ調べることができた。

新聞でなければならない。庄内平野や日本の漁業で新聞づくりの経験のある子供達は、項目をたて話し合いながら進めていった。

数字で表わされたものは、グラフ化していった。算数の学習である。原料の分布について調べた。植物を原料とする物もあり理科の学習になった。おもしろい表現をしようと、イラストを入れたりした。これは図工の学習である。はっきりと領域こそわけれぬが、少なくとも、それらの教科の学習にかかわりを持つ展開となっていたのである。

特に、専門用語を調べるのにたいへん苦勞したグループもあったが、「わからない言葉があれば、国語辞典や百科事典で調べれば良い。」ということは誰もがつかみとっていった。

この力こそ、梓にとられることのない、生涯に生きて働く力となるものではないだろうか。

発表する段階になり、人前ではずかしがらずに発表する貴重な体験の場となった。多勢の前で発表するのを苦手とする子供達であったが、割り当てを決めたりして、練習をし、どうにか発表することができた。質的には、書いたことを順送りに発表するにとどまったが、今後は、調べる学習段階の様々な場面で問いかけをし、関係的に、より広い視野からものを見る目を育てていかねばと思えてならなかった。

二学期の後半には、ゆとりの時間を活用してつくってきた植物観察とあわせ、「五年展」という形で展示会を開いた。

そして最後に、協力いただいた産地の組合の方々や、伝統工芸士の方にあらためてお礼の手紙を送り、この学習を終ることにした。(社会科の時間16時間)

3 評価について

このような学習を展開してくると、市販のワークテストの評価にはなじまない。そこで、教師の机間巡視によるノートの記入事項や討論の様子、または子供達の発言を聞きとり、観点別に評価をしていった。

◦知識・理解

- ・伝統的工芸品の内容、地域の自然の様子、歴史的な背景などの理解度。

◦観察・資料活用能力

- ・必要とする資料が何か、送られてきた資料の選択活用能力。

◦思考・判断力

- ・資料を活用し、関係的にものを見る力。

◦関心・態度

- ・伝統的工芸に対する関心。

評価をするということになると、自分自身、かなり主観的になってしまった傾向は否めない。基準をもうけ、できるだけ客観的な評価をすべきだと思う。また、あまり評価ということは意識せず、子供達にのびのびと、ゆとりを持って学習させることが必要のように思う。

いかに遠まわりをしてでも、今まで無関心だったこの工業の様子を知り、この歴史的な産

物に深い愛情を示すことが目標ではないだろうか。

私自身，評価ということよりも，つまづく子供達への援助のあり方について考え，子供とともに学習してきたようなものである。

4 終りに

私自身，社会科の学習がこれで成立するかどうか不安でたまらなかった。現在でもこれでいいのか，自問自答を繰り返す毎日である。

しかし，楽しかった。

新しいことが，実感としてつかみ取れたような気がする。

それは，学習内容そのものへの思いばかりでなく，生き生きと手紙を書き，返事に目を通しながら目頭をおさえこみあげてくるうれしさをかくしきれずにいた子供達への思いである。

ふだんは無口な子供が，大声で発表した。クラスの友達としっくりいってない子供が，自分の精一杯の力を出し学習に参加し，また，まわりの子供達もあたたかい理解を示してくれた。同じひとつのものを追求する心が，互いにぶつかりあい通じあうことができたのではないだろうか。

子供達は新しい事象に自分から入り込み，自分達の経験を生かし追求し，自分達の言葉で表現していた。長い時間かけて作りあげた喜びに満ち足りていたようだ。あきることなく最後まで，意欲を示し学習に取り組んだ姿こそ，本校でねらっている学習に取り組む子供の姿である。他の学習場面においても私自身この経験を生かし，生涯にわたって生きてはたらく力の身につくような学習指導を展開して行きたい。

評

社会科の学習では，「社会科の好きな子供をどう育てるか」が大きな課題です。子供たちに社会科を好きにさせるためには，学習意欲の喚起とその持続化が大切です。そのためには，教材の提示や学習活動の工夫などが必要です。

生き生きとした授業というのは，そこに子供たちの心をゆさぶる何かがあるのです。

「多様な学習活動の導入」もその一つであります。多田先生の実践記録には，体験的な学習活動が展開されております。そこには，「社会事象との新鮮な出会い」を大事にする独創的な探究的学習の取りくみがみられました。この実践記録は，これからの社会学習の一つのあり方を示唆してくれました。

体験重視の観点から，社会科の指導計画を見直し，実感に根ざした学習活動を推進することは，今日の教育の方向です。

今後とも，一人ひとりの子供たちが，「自ら学びとる学習」をめざして生き生きと活動する授業を創造し，研究実践を積まれるよう期待いたします。